

「中学生のみた昭和10年代」と個人生活史研究：三段階の分析の試み(下) (2)

水野, 節夫 / ミズノ, セツオ / MIZUNO, Setsuo

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / Society and Labour

(巻 / Volume)

40

(号 / Number)

3-4

(開始ページ / Start Page)

383

(終了ページ / End Page)

346

(発行年 / Year)

1994-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00018712>

『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究

——三段階の分析の試み——(中)―1』、『社会労働研究』, 第39巻, 第2・3号, pp. 342-370。

3. 水野節夫, 1993 a, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究——三段階の分析の試み——(中)―2』、『社会労働研究』, 第39巻, 第4号, pp. 189-211。

4. 水野節夫, 1993 b, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究——三段階の分析の試み——(下)―1』、『社会労働研究』, 第40巻, 第1・2号, pp. 109-153。

5. 中野卓編著, 1989, 『中学生のみた昭和十年代』, 新曜社。

☆本稿は平成五年度文部省科学研究費一般研究(c)による成果の一部である。

(13)時局観——〈軍事・時局〉,「二・二六事件」,「徳利割りの侵略」,「チャガマの出陣／忠二郎叔父出陣」

(14)受験・勉強への取り組み方——〈学校・受験〉,「姫路高校受験」,「姫高合格」

(15)書きとめておくという行為——〈日記・手紙など〉

関連テーマ領域として設定した〈店関係者など〉と〈夢〉の2つが事象に対応するものとしては入ってこないという点は、注目に値する。事象設定は中野さんへのインパクトいかんという観点から各項目のそれなりの重要性を視野のうちに組み込んでなされているだけに、ほくとしてはこれを見出し分析の限界と解釈しているが、〈店関係者など〉の方はともかくとして、〈夢〉についてはそれなりの意味づけを試みるべきところかもしれない。

5) 念のために「祖父と曾祖父の額」と「おたけどんへの手紙」から関連箇所を書き抜いておこう。「祖父と曾祖父の額」では、「隠居に掛っている暗い油絵の額はオオオジイサン……で、二階の奥の座敷に掛かっている写真の額はオジイサン……で、この方は家へ〔……〕婿養子にきた人で……, 向いの(……)亡くなった老先生……は、オバアサン〔峯〕の弟だそうだ。オバアサンを知っているのは父母と兄〔恭雄〕だけ。」(pp. 15-16)とある。「おたけどんへの手紙」の場合はさらに詳しい。「このあいだ……汽車で垂水を過ぎる機会があり、……懐旧の情に耐えませんでした。垂水時代のことを、それからそれへと思い出し、……眼に入るもの全て懐かしい幼年時代の思い出に満ちていました。……おたけどんと海岸に漬物石を探しに行ったこと。……死んだお辻どんが、よく『親を求めて鳴く鳥の……』という歌を歌っていたこと。僕はいつもオツユどんと呼んでいたこと。歌といえば、おたけどんに『青葉茂れる桜井の……』や『淡山先生』の歌を教えてもらったこと。……それから隣にいたアメリカ人の母娘の、その小さな女の子が、遊びに来ては僕の玩具をこわして帰った事。」(pp. 185-186)

6) 生活史研究会の第34回例会(1989年10月7日)の場でこの点について中野さんにおたずねしたが、残念ながら中野さん自身、もはや思い出すことができなかった。

『中学生』論文(下)―2のための参考文献一覧

1. 水野節夫, 1992 a, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究——三段階の分析の試み——(上)」, 『社会労働研究』, 第38巻, 第3・4号, pp. 80-118。

2. 水野節夫, 1992 b, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究

は、同じく本人の自己形成に関連のあると思われる〈人〉以外の対象世界内もしくは内面世界での事象のうち、少なくとも本人のある人生局面において何らかの意味で‘特異な出来事’として本人に意識されたことが確認できるもののことである。事実(6) 家族・親族の動きの場合は、〈もの〉の一例として位置づけることができることは言うまでもない。また、(9) の読書・鑑賞の対象となるものとか、(10) の民俗的なもの、(11) の自然、(13) の時局、(14) の受験・勉強なども、ここでいう〈もの〉にあたるものである(なお〈こと〉としては、「狼のたたりの嘶」(pp. 161-166 参照) と入試の失敗という危機とそののりこえ (pp. 189-190 参照) の2つをあげることができる。これらの〈こと〉については、(10) と(14) の〈傾向〉を検討する個所で言及する)。にもかかわらず、本文ではこれらの〈もの〉にそのものとして注目するというよりもそうした〈もの〉との相互作用過程に入っていく主体の側の〈傾向〉に焦点を絞ることにした。その理由は、データとの対話を積み重ねていく過程で、そうした方が、中野さんの社会的自己形成へのインパクトいかにという問題によりリアルに迫れるのではないかという判断を持つようになったからである。

- 4) 見出しのみに着目するという意味で見出し分析水準での絞り込み方は、個別の内容にまで立ち入ってなされるインパクト分析水準でのそれに比べて大ざっぱなものにならざるをえないわけだが、そのことを考慮した上で、結节点的事象として選び出した項目と関連テーマ領域・大見出しとのゆるやかな対応関係に触れておけば次のようになる。

- (1) 井上先生——〈学校・受験〉
- (2) 中尾伯父——〈家族・親族〉, 「母の兄中尾万三の死」
- (3) 父——〈家族・親族〉, 「徳利割りの侵略」
- (4) 母——〈家族・親族〉
- (5) 弟の浩——〈家族・親族〉
- (6) 家族・親族の動き——〈家族・親族〉
- (7) 思い出嗜好——「おたけどんへの手紙」, 「その他」
- (8) 哲学的思索と内省——「その他」
- (9) 読書・芸術鑑賞と標語——〈読書, 美術・演劇・映画・音楽鑑賞など〉
- (10) 民俗的なものへの関心——〈風俗・風物〉
- (11) 自然との交流——〈旅〉
- (12) 对人的交流——〈友人〉, 〈日記・手紙など〉

あらばそれもよし。ただし勿論その間も自分自身の学問は続けるべし。これを以って志小なりと言はんか、左にあらず。余、いわゆる英雄偉人となるを欲せず。真の人間たらんのみ。(pp. 118-119)

ここには、中野さんに独自の思想と価値観、人間観が、「将来の志望」を表明するという形で確認されているわけだが、この当時の中野さんが、——もしかしたら驚くべきことなのかもしれないが——すでに相当程度の自立的姿勢を身につけ、かなりはっきりとした人生設計を持っていたことがよくわかる。しかも、「余の受験用学力貧弱なれば……『都落ち』はやむなし」というくだりに接すると、そこに、非常に醒めた眼で自分自身の現状を見つめている中野さんの姿が浮かび上がってくるのである。(この項続く)

注

- 1) もちろん、別の意味で言えばこの40の小見出しだけではデータ数が少なすぎるといふ点についても指摘しておくべきだろう。つまり、中野さんの社会的自己形成へのインパクトの問題をこれらの小見出しに盛られている内容だけに限定して論ずるとすれば、とりわけ後に本文で◇印に属するデータ群と呼ぶものをすっぱり視野の外においたままになるので、それではやはり不十分と言わざるをえないということである。本文でわざわざ《最低限》と表現した所以である。
- 2) ここで《間接的ながら》という限定を加えているのは、基本的に言って、本文ですぐ後に設定する15の事象がそのままストレートに中野さんにインパクトを与えると言うよりも（もちろんそういう場合もありうるが）、各々の事象に属するさまざまな出来事やエピソードを通じてインパクトは生み出されてくると考えているからである。
- 3) 自己環境の構成要素の候補として本文では事実上〈人〉に絞る形で設定したが、そうした候補としては、その他に、〈もの〉や〈こと〉を想定することができるという点は指摘しておきたい。〈もの〉とは、本人の自己形成に関連のあると思われる〈人〉以外の対象世界内もしくは内面世界での事象のうち、繰り返し生起してくるもののことであり、〈こと〉と

国正……の、得能文氏の「深い心」と題した一文字、感ずるところあり。味わうべし。／「自己が自己に与えた法則に従って働けば善であり、そうしなければ悪である」。まさに、これだ。……真実に切実に不幸を感じるのは深く自ら省みたときである。そうだ。まさにしかり。(p. 110)

といったくだりに見られるように、7「深い心」の場合にもあてはまる。

最後は、自分の考え方や価値観とは対照的な観点からなされている主張との関連で、自分の位置や立場を明確化させているものである。ここで念頭においているのは、真の人と名利とを対比させながら出されてくる4「真人と名利」での次のようなくだりである。

我が意を得たり。されど我は真人ならざれば名利を求む。これ真実にして動かすべからず。人たるもの名利を求めざるを得ず。求むるにより向上するなり。(p. 67)

こうした思索や内省が、先に触れておいた三重の意味での社会的自己形成のプロセス（水野〔1993 b : p. 128〕）を、あるいは生み出し、あるいは促進していることは、これまでの引用から明らかだろう。そうした中で、2「英雄観と弘法さん」での「非凡な凡人」への志向と並んで、とりわけ重要なのは、9「将来の志望」である。

もとより余の将来の志望定まれり。数学ないし理科の系統は余の性に合わず。されば文科を志望す。京都の第三高等学校は入学不可能なるべし。余の受験用学力貧弱なればなり。されば「都落ち」はやむなし。高校を終えれば大学に進まむ。専攻は日本史。大学卒業後は経済的に可能性あれば研究生として残るもよし、中学教師の職

れて、それに反応する形で自分の考えや想いを紡ぎ出してくるというものである。

この後者のタイプをもう少し細かく見てみると、次の四つを区別することができそうである。第一は、自分の見た演劇や読書内容などに対する感想や印象を表明しているものである。6「エゴール・ブレイチョフ」(「押さえつけられて黙っているものは、押さえる力がゆるめば、暴れ始めるに違いない。」(p. 105) ——『エゴール・ブレイチョフとその他の人々』というゴーリキーの作品の公演を見た時の感想の一部)、13「盲教育展」(「生きる人間の貴い姿を最も突き詰めた形で写しだしているように思えた。」、p. 183)、16「クオバディウスと枚方火災」(「殉教者の厳かな静かな死は初期キリスト教信仰の崇高さをしみじみ感じさせた。……キリスト教のいう『愛』について前よりぐんと深い理解が得られたように思われる。」(pp. 249-250) ——『クオバディウス』という本を読んでの感想から) 等が、それにあたる。

第二は、ちょっとした事件にでくわし、そこから自分の思考圏を拡大もしくは深化させていく形で、一種の思考訓練を行なっているもの。5「小鳥と子蛇」では、帰宅の途中に、子蛇に襲われた小鳥が入っていた鳥籠をかこんで騒いでいる人々の光景を見て、「子蛇は小鳥と違って自分で自分の食べ物を探さなければならなかったのだ。……人間はこの子蛇を、感情にかられて殺してもいいのだろうか。」(p. 69) と述べられているし、8「勘太先生と女中」では、中学教員である「勘太先生の家で、もとの女中だった女がガス自殺をした事件」を取り上げた新聞報道について、いくつかの批判点を書きとめながら、「人は、はたして人を裁き得るのだろうか。否、と或る人は言う。しかし、人が、もし人を裁かなければ、社会の秩序は保たれまい。」(p. 117) と記されている。

第三は、自分の考え方や価値観にピッタリのものに出会って、その主張を敷衍しながら、自分の中に取り入れていっているものである。先に一部引用した2「英雄観と弘法さん」の場合がそうだし、

このように、中野さんにおいてはなつかしさの感覚が基本的なものなのだが、それだけが思い出にまつわる感覚のすべてではない点も忘れてはならない。39「風邪」では、思い出は悲しさに結びついている（「このふつか かせひきてうちふしぬ うちふせば さまざまにものおもひせられて かなし。」, p. 245) し、すでに (4) 《母の場合》で見たように、母にまつわる思い出は、死別・離別の不安のようなものを生み出しているのだから。いずれにせよ、中野さんにとって思い出が重要な意味をもっていたらしいことは確実なわけで、そうした傾向を総称して、ここでは、[○]思い出嗜好と名づけておくことにしたい。

(8) 哲学的思索と内省 (第9表参照)

中野さんは、いくつかの個所で、哲学的思索と内省という形で、自分自身との対話を行なっている。

そのやり方の中には、1「自画像と人間論」のように、外からの直接的刺激とは関わりなく、いきなり自分の思考内容を日記帳に書きつける中で思索を深めていっている（具体的には、人間と自然との対比についての思索を進める中から、〈人間としての真実〉という発想へとたどりついている）というものもあるが、大部分は、何らかの出来事に触発さ

第9表 《哲学的思索と内省》への言及のある小見出し一覧

◎ 1「自画像と人間論」(3)pp. 28-30	◎ 2「英雄観と弘法さん」(5)pp. 55-56
・ 3「島本先生の凱旋」(6)p. 64	◎ 4「真人と名利」(6)pp. 67-68
◎ 5「小鳥と子蛇」(6)p. 69	◇ 6「エゴール・ブルイチョフ」(9)p. 105
◎ 7「深い心」(10)p. 110	◎ 8「勘太先生と女中」(10)pp. 116-117
◎ 9「将来の志望」(10)pp. 118-119	◇ 10「明ちゃんの結核」(10)pp. 135-136
◎ 11「京二中卒業式」(13)p. 174	◎ 12「卒業翌々日の夢」(14)p. 175
◇ 13「盲教育展」(15)pp. 183-184	◇ 14「十月の日々」(18)p. 227, ℓ. 11-15
◇ 15「明ちゃんと宗教を論ず」(18)p. 231	◇ 16「クオバディウスと枚方火災」(20)p. 248, pp. 249-250

懐旧の情に、ただそこここと覗きこんでは立ち去りかねていた。
(16「秋の日々」, p. 95)

浩の机の上に軍歌集を見つけて開いてみると、なつかしい思い出の「青葉しげれる桜井の」があった。うれしくなって、知っているのをかたっぱしから歌いだした…… (22「春寒し」, p. 121)

……ゆかりなくも志水純の来たりし夢む。なつかしさにたえず
(26「純ちゃんからの最後の通信」, p. 177)

……母が火鉢で……餅を焼いておられた。モチと言うよりアモという名の方が親しみ深い。あの、なんとも言えぬ冬のぬくもりをなつかしむ思いがアモという言葉に籠もっている。(35「愛称的敬語」, p. 238)

といった具合に、いたるところで表明されている。しかも、そうしたなつかしさは、どうやら、かつて親しかったものとの出会いによってというよりも（もちろん、そういう場合も見られるが）、むしろより幅広く、過去のもの・昔のものとの出会うことによって誘発されてくるらしいことは、11「六月の日々」の次のようなくだりからもうかがうことができる。

……五条坂停留所で市電を待っていると、小学校の同級生の山本君に出会った。どこかの小売員に成ったらしく、きちんと着物……を着て、きっちりと角帯をしめていた。顔だけは以前と少しも変わっていない。二人とも同時に気付いてニッコリとしあつて会釈した。あんまり親しく遊んだ友達でもなかつたけれども、懐かしいものだ。(p. 65)

に歌いたくなって『十五夜お月さん、ごきげんよう』と、幼い頃の歌を歌う。』, p. 223) 等

(c) 中野さんのまわりであった昔のこと

34 「オトミドン」(「……おとみどんが死んだそうだ。……色々思い出すことがある。……色んな人が死んでいった。』, p. 230),

40 「クオバディウスと枚方火災」(「激しい空気の振動で障子が揺れた。宇治の火薬庫の爆発のときを思出した。』, p. 249) 等

といったグループにわけることができる。

中野さんはどうして昔話や思い出に引きつけられていくのか。そのヒントは、例えば「ポップンの思い出」に見てとることができる。

ああ、思い出したポップン・ポップン・ポップン。しかしその音も今では姿を消してしまっている。長いガラスの管の先に大きな薄い球が付いていて、管を吹くと球の特別に薄い底の部分がポツと音をだしてふくれ出る。吸うとピンと音を立てて底が引っ込む。女の子のあそびだが、無くなってしまっただけに懐かしい。(6「ポップンと花火」, p. 45)

また、28「おたけどんへの手紙」に出てくる「このあいだ……汽車で垂水を過ぎる機会があり、車窓より見える淡路海峡の昔のままの風光に、懐旧の情に耐えませんでした。」(p. 185) というくだりも示唆的である。ここで注目したいのは、「無くなってしまっただけに懐かしい」とか、「昔のままの風光に」出会って「懐旧の情に」うたれるということ、つまり、過去との出会いが、中野さんのうちになつかし^なしさ^さの感^か覚^じとでも呼べるものを生み出してくるという心理的メカニズムである。

このなつかし^なしさ^さの感^か覚^じは、例えば、

久しぶりで、おそらく十年ぶりで京都幼稚園に行ってみた。……

……夕食後、思い出話が始まった。母の母が五条の家へ来て別の部屋で蓄音機を鳴らしているのを聞いて、父が浄瑠璃をやるのかと勘違いして「おまきの婿さんは器用な人や。忠八さんは、粹な人や」と言われたとか。／隠居へ行く廊下の壁を、お客があるので塗り直したところを、松井の叔母……が久留島の叔父……の手伝いをして、壁いっぱい汽車の絵を書いた、とか。／くにさんと秀さん、しなさんと忠二さんは、「喧嘩のコンビネーション」やった、とか。…… (13「母の兄中尾万三の死」, pp. 75-76)

……眼に入るもの全て懐かしい幼年時代の思い出に満ちていました。／……満艦飾をした軍艦がマーチを奏しながら海峡を通った事。おたけどんと海岸に漬物石を探しに行ったこと。……／また、浜で貝殻拾いや小石拾いをしたこと。……石をみんな捨ててしまったこと。……心配したりしたこと。……じっと見ていたこと。……暮らしたこと。…… (28「おたけどんへの手紙」, pp. 185-187)

あるいは、「お祭りの日、回顧的気分で父が始めた昔の話が面白いので、急に思い立って、そばにあった紙に書き取りました。……」(30「祭りの日の昔噺」の書き出し部分での説明, p. 192) といった調子で、思い出話や昔話が、とにかくこまめに書きとめられているのには驚かされる。

その内容は、というと、大きく言って、

(a) 先祖とのつながりへの関心を示すもの

2「祖父と曾祖父の額」, 20「お火焚」(「ひいじいさん……の日記を読み、昔のおひたきを調べる。……」, p. 113), 37「法事」(「お供養の席で母の話した祖母峯についての話」, p. 243) 等

(b) 中野さん自身にまつわる幼い頃のこと

18「風呂の思い出」, 28「おたけどんへの手紙」, 31「足立見舞いと月夜」(「月が、蚊帳ごしながら、まぶしい。……なんとはなし

(7) 思い出嗜好

第8表からもわかるように、まず目をひくのは、昔話や思い出にまつわる記述がかなり多いことである。例えば、「思い出の記」の執筆(3「読書と冬の日」、4「春休み予定」)から始まって、父の思い出噺(9「学期末試験前」)、珍しくなった人力車を見て「思い出す幼い日のこと」(10「人力車」)、小学校の同級生に会った時の話(11「六月の日々」)、例のハチマキ石のエピソード(12「短いメモ群」)等など、といった具合である。しかも、

第8表 《思い出嗜好》への言及のある小見出し一覧

◇ 1「茶話会」(1)p. 9, ℓ. 2-5	◇ 2「祖父と曾祖父の額」(2)pp. 15-16
• 3「読書と冬の日」(2)p. 18, ℓ. 2	• 4「春休み予定」(3)p. 31, ℓ. 9
• 5「身辺整理」(4)pp. 41-42	◇ 6「ポップンと花火」(5)pp. 45-46
• 7「図画と作文」(5)p. 50, ℓ. 12-15	• 8「合同ハイク」(5)p. 51
◇ 9「学期末試験前」(5)p. 57	• 10「人力車」(5)p. 59
• 11「六月の日々」(6)p. 65	◎12「短いメモ群」(6)p. 68
◎13「母の兄中尾万三の死」(7)pp. 74-76	• 14「知井坂越え小浜・海津の旅」(7)p. 76, ℓ. 13-14
• 15「中尾の叔父の写真」(8)p. 90, ℓ. 1-2	◎16「秋の日々」(8)p. 95
• 17「名古屋の石黒夫妻」(9)pp. 99-103	◇18「風呂の思い出」(10)pp. 109-110
• 19「巨椋池」(10)p. 112, ℓ. 14-15	• 20「お火焚」(10)p. 113
◇21「正月十五日」(10)pp. 115-116	◇22「春寒し」(10)p. 121
• 23「史学会の初瀬・大將軍山・伊那佐山行」(10)p. 127, ℓ. 11-12	• 24「昭和十三年正月」(13)p. 171, ℓ. 14-15
• 25「幼稚園の夢」(13)p. 173	◇26「純ちゃんからの最後の通信」(14)p. 177, ℓ. 8-9
◎27「姫路行前夜」(14)p. 179, ℓ. 2-12	◎28「おたけどんへの手紙」(15)pp. 184-187
• 29「コドモシ」(16)pp. 191-192	◎30「祭の日の昔噺」(16)pp. 192-195
• 31「足立見舞いと月夜」(18)p. 223	• 32「あまけ」(18)p. 224
◎33「路傍の石」(18)p. 224	◇34「オトミドン」(18)p. 230
• 35「愛称的敬語」(19)p. 238	• 36「受験直前」(19)p. 240
◇37「法事」(19)p. 243, ℓ. 1-8	◇38「小吉郎師匠」(19)pp. 243-244
◇39「風邪」(20)pp. 245-246	◇40「クオバディウスと枚方火災」(20)pp. 248-250

車。父・母……兄・僕・弟・姉……伯母・明・進……」(p. 39) といった具合に、親族行事への出席者が一人一人数え上げられていることがよく見られる。その上で、もしくは、それと平行して、その場で語られた話(53「忠二郎叔父帰宅」)やら発言内容(70「受験直前」)などがていねいに書きとめられている。

第三は家族や親族のメンバーをめぐる出来事の記録である。8「弟も二中へ」や48「ノボチャンの見合い」、64「見合い写真」、65「ノボチャンの嫁さん」といったところが典型的なものだが、これには、話題もしくはうわさのタネとしての親戚の人々の描写(例えば32「久留島叔父の事故」や33「松井邦子叔母再婚」)も含めていいだろう。ここで注目しておきたいのは、そうした話題を書き記している中野さんの眼差しが実に暖かいことである。昭和12年5月、香港でのランチの爆発事件に出くわした久留島叔父の事故に触れたくたぐたを例にとれば、

〔五月〕二十七日、「夕刻、久留島の叔父……が、来られた。色々〔香港での〕話を聞く。おめでとう。おめでとう。皆の談笑する声、人々のぬくもりのこもった部屋……の中の空気は、叔父さんの無事が嬉しくてたまらない思いで満ち満ちている。(p. 134)

といった具合で、対象となっている人々を暖かく包みこむような眼差しを感じとることができる。

第四は兄の恭雄が、とりわけ49「兄に赤紙」以降になると、先に検討した弟の浩について重要な存在として浮かび上がってくるということである。これは、52「兄の応召」や54「兄の面会」、67「兄兵営より外出」、74「兄外泊」などのデータによって確認することができる。

以上の検討を踏まえるなら、家族・親族の動きが中野さんの副次的な関係対象をかなり日常的な形で形作っていたことはほぼ確実と断言していいように思われる。

標語》と並んで、言及データの圧倒的多さ（小見出し数=77）が目を引きく。◎印のものは見あたらないとはいえ、◇の数になると25と相当な数にのぼっている。ここでは◇印の小見出しの内容に注目しながら、家族・親族の動きについてどういった言及のされ方が見られるかを押さえていくことにしよう。その特徴は大きく言って4つあるように思う。

第一は、親族の歴史がそれなりの詳しきで書きとめられていることである。典型的には23「名古屋の石黒夫妻」や47「祭の日の昔噺」、60「東京の鈴木の家で」に見られるものだが、ここでは47の書き出しの部分を書き写しておくことにしよう。

昔、〔五世忠八の後妻はぜいたくな人で〕芝居に行くには、朝六時に起きて、丁稚が提燈をもって、火鉢や御馳走を持って行ったものだ。重箱も、同じものを何度も持って行けないと言って、幾種類も変わった立派な重箱があった。芝居小屋の前の『前茶屋』で三度も着替えをしたという。／〔このような暮らしが家運を傾け、後妻の離縁など家政改革がなされた。その後、先妻長女の婿の六世忠八は政治にかかわって家業をおろそかにした。父幼名忠三郎は若くして七世忠八となり、家業を立て直した〕。／……（p. 193）

3「祖父と曾祖父の額」で額の人物たちについて「誰が誰、誰が誰」といった形で確認されているものや11「戦争と父の弟達」で紹介されている父の弟達の経歴についての確認もこのグループに入れることができるだろう。

第二は中野家に集まってくる親族の人々の言動を事細かに記録していることである。親戚の人々を引きつけてくるきっかけとしては、10「誠一叔父の渡満」、19「母の兄中尾万三の死」、30「一子ちゃん新夫妻入洛」、39「ノボチャン出征」、52「兄の応召」といったところがあげられる。そうした場合、例えば「五日、日曜、九時五分の下関行き快速列

第7表 《(両親と中尾伯父と弟を除いた) 家族・親族の動き》への言及のある
小見出し一覧

• 1「弟の誕生日と書籍購入」(2)p. 14, <i>ℓ.</i> 7	• 2「三井寺の鐘」(2)p. 15, <i>ℓ.</i> 7-8 -10
◇ 3「祖父と曾祖父の額」(2)pp. 15-16	• 4「山口の季はん」(2)p. 20
• 5「二・二六事件」(3)p. 21, <i>ℓ.</i> 4-7, pp. 22-23	• 6「同月同日」(3)p. 28, <i>ℓ.</i> 2-3
• 7「自画像と人間論」(3)p. 28	◇ 8「弟も二中へ」(4)p. 33, <i>ℓ.</i> 5, <i>ℓ.</i> 13, p. 34, <i>ℓ.</i> 2
• 9「轟夕起子」(4)pp. 36-37	◇ 10「誠一叔父の渡満」(4)pp. 37-40
◇ 11「戦争と父の弟達」(4)pp. 43-44	• 12「音楽と散髪」(5)p. 46, <i>ℓ.</i> 5-7
• 13「図画と作文」(5)p. 50	• 14「季節は初夏」(5)p. 55, <i>ℓ.</i> 1
• 15「ねぼけ」(5)p. 55	• 16「中尾の叔父と富野の叔父」(5)pp. 57 -58
• 17「万葉集」(5)p. 58, <i>ℓ.</i> 6	• 18「点景」(6)p. 67, <i>ℓ.</i> 3
◇ 19「母の兄中尾万三の死」(7)pp. 70-76	• 20「母飛び帰るの報」(8)p. 92, <i>ℓ.</i> 8-9
• 21「父母帰宅」(8)p. 94, <i>ℓ.</i> 1-6	• 22「前にいた女衆と男衆」(8)p. 98
◇ 23「名古屋の石黒夫妻」(9)pp. 99-103	• 24「徳利割りの侵略」(9)pp. 103-104
• 25「宮本武蔵」(9)p. 108	• 26「富野庄の柿」(10)p. 109
• 27「数え歳で十八」(10)p. 115, <i>ℓ.</i> 5	• 28「映画『蒼氓』」(10)p. 119, <i>ℓ.</i> 12-14
• 29「医療組合」(10)p. 120, <i>ℓ.</i> 1-4	◇ 30「一子ちゃん新夫妻入洛」(10)pp. 127 -128
• 31「新四年生の四月」(10)p. 129, p. 130	◇ 32「久留島叔父の事故」(10)pp. 133-134
◇ 33「松井邦子叔母再婚」(10)p. 134	• 34「明ちゃんの結核」(10)pp. 135-136
• 35「叔父たちの時局観」(11)pp. 140-141	• 36「木曾福島から白川郷への旅」(11)p. 141
• 37「旅のあと」(11)p. 147	• 38「忠二郎叔父より」(11)p. 150
◇ 39「ノボチャン出征」(12)pp. 154-155	◇ 40「明君外出許可」(12)pp. 155-156
◇ 41「姫路行前夜」(14)p. 179	• 42「おたけどんの来訪」(15)p. 184, <i>ℓ.</i> 8
• 43「西山たけよりの手紙」(15)p. 188	• 44「谷井伯父死去と高校不合格」(15)p. 189
• 45「増田へ」(15)p. 190	• 46「コドモシ」(16)p. 192
◇ 47「祭の日の昔噺」(16)pp. 193-195	◇ 48「ノボチャンの見合い」(16)p. 195
◇ 49「兄に赤紙」(16)p. 195	• 50「増田恵一君への葉書」(16)p. 196
• 51「増田恵一君よりの葉書」(16)p. 197	◇ 52「兄の応召」(16)pp. 198-202
◇ 53「忠二郎叔父帰宅」(17)pp. 206-207	◇ 54「兄の面会」(17)p. 207
• 55「舞踏会の手帳」(17)p. 207	• 56「兄と孝吉っとな」(17)p. 208
◇ 57「奉天より」(17)pp. 209-210	• 58「菅平行」(17)p. 211
• 59「高原の日々」(17)pp. 213-216, p. 218	◇ 60「東京の鈴木の家で」(18)pp. 219-220
• 61「大丸の火事と大文字」(18)p. 221	• 62「店員応召とチーヤンの報告」(18)p. 222
• 63「九月後半の日々」(18)p. 225	◇ 64「見合い写真」(18)p. 228
◇ 65「ノボチャンの嫁さん」(18)pp. 230-231	• 66「明ちゃんと宗教を論ず」(18)p. 231
◇ 67「兄兵衛より外出」(19)p. 233	• 68「増田君との交信」(19)pp. 234-235
• 69「兵隊さんの食い気」(19)p. 237	◇ 70「受験直前」(19)p. 240
• 71「伊吹山」(19)p. 241	• 72「法事」(19)pp. 242-243
• 73「小吉郎師匠」(19)pp. 243-244	◇ 74「兄外泊」(20)p. 245
• 75「風邪」(20)p. 246	• 76「クオバディウスと枚方火災」(20)p. 249, <i>ℓ.</i> 2
• 77「姫高合格」(20)pp. 252-253	

げのたちこめた風呂のなかで手足をのぼすとき、むやみに誰かにお礼を言いたい気持ちで目をつむった。(pp. 34-36)

これらの記述は——その一部分は、既にテキストのタイプ化の議論の際にタイプDの一例として引用したものだが(水野〔1993 a : pp. 201-202〕)——自分より三歳年下の弟浩が二中に合格した時の様子をかなり細かく書きとめている中に、いわば挿入されているものだ。このエピソードが、中野さんの自己形成に対して〈インパクトを与える可能性のあるもの〉の一つとして選び出されてくるのに十分なだけの内実をもっていることは、一読して明らかだろう。こうした体験に加えて、恐らく中学校での中間試験のことだと思われるが、「浩の席次も気になったので見てみたら五十名中の十八番だったので安心した。けれども僕の二のまいは踏ませたくない。」(8「席次」, p. 63) といった、弟思いの中野さんの一面が非常によく出ているくだりを目にすると、兄、姉、弟の三人の中では、弟の浩がこの時期の中野さんにとってかなり特別な位置を占めていたのではないか、という印象を読み手がもったとしても、それほどおかしくないだろう。しかし、『中学生』全体で検討してみると、(3「弟も二中へ」と8「席次」を除いて)第6表のウエイトづけがすべて・印となっていることからもうかがえるように、弟はその後、必ずしも重要な存在としては浮かび上がってこないことが明らかになってくる。この、弟にまつわるエピソードは、まさに一回的なものにすぎず、必ずしも持続的なインパクトを及ぼしていないのであって、その意味では、これまで検討してきた四人の場合とは対照的に、インパクトを与える可能性が十分あったにもかかわらず結局のところIP1とはならなかった一例として位置づけることができる。

(6) (両親と中尾伯父と弟を除いた) 家族・親族の動き (第7表参照)
まず何と言っても、後に検討することになる (9) 《読書・芸術鑑賞と

を重ねあわせて考えるなら、中野さんの存在の深いところで、母という存在がいわば情動的基盤として重要な意味をもっていたことが浮かび上がってくると言っているだろう。

(5) 弟の浩の場合 (第6表参照)

なぜここで、例えば兄の恭雄や姉の久子ではなく、弟の浩に注目するのか。それは、3「弟も二中へ」のエピソードが際立っているからである。

母が未だ風邪がなおりきらないので、僕が弟と〔すでに貼りだされていることは聞いている弟の番号を実際に〕見に行く事になった。僕は独り相好が崩れる。／……僕は涙が出そうになった。なぜこんなに嬉しいのやろう。弟がそれほど嬉しそうな顔をせぬのが、しゃくに触るほどだ。……／チビも今日は何時もと違うらしい、と思っているだろう。なんとも嬉しくて嬉しくて。ひとの喜ぶのを見て嬉しくない奴があったら、そんな奴を僕はなぐりたおすぞ。……／湯

第6表 《弟の浩》への言及のある小見出し一覧

• 1「弟の誕生日と書籍購入」(2)p.14	• 2「二・二六事件」(3)pp. 21-22
◎ 3「弟も二中へ」(4)pp. 33-36	• 4「誠一叔父の渡満」(4)p. 37, p. 39
• 5「プチ・ショウズ」(4)p. 41, ℓ. 3	• 6「ねぼけ」(5)p. 55
• 7「悪夢」(6)p. 62	◇ 8「席次」(6)p. 63
• 9「カッコウ」(8)p. 94	• 10「秋の日々」(8)p. 97, ℓ. 13
• 11「お火焚」(10)p. 113	• 12「正月十五日」(10)p. 115
• 13「春寒し」(10)p. 121, ℓ. 4	• 14「明君外出許可」(12)p. 155
• 15「姫路行前夜」(14)p. 179	• 16「西山たけよりの手紙」(15)p. 187, p. 188
• 17「想旅慕雲」(17)p. 204	• 18「梅雨キャンプ」(17)p. 205
• 19「兄の面会」(17)p. 207	• 20「舞踏会の手帳」(17)p. 207
• 21「兄と孝吉とん」(17)p. 208	• 22「高原の日々」(17)p. 213
• 23「東京の鈴木の家で」(18)p.219, ℓ. 2	• 24「大丸の火事と大文字」(18)p. 221
• 25「足立見舞いと月夜」(18)p. 223, ℓ. 13	• 26「九月後半の日々」(18)p. 225, ℓ. 12-13
• 27「法事」(19)p. 242	• 28「姫高合格」(20)p. 252, ℓ. 2-5

出すということがいかに重要なものであるかを如実に物語っているように思う（後述の(7)《思い出嗜好》参照）。それはともかく、中野さんはここで、そうした思い出に浸りながら、「母の寝息」が子守り歌のように聞こえ、母とのもしかしたらかなり長くなってしまふかもしれない別離に「暖かい寂しさ」を感じ、そして、恐らくは、幼かった頃の中野さんが母親に対して抱いていた気持ちの‘再現’的要素を含んでいるのではないかと思われる「牛乳の色のような気持ち」——これが5感に訴える体験のうちでもとりわけ特異な《共感覚的体験》を指し示すものである点に注意されたい（水野〔1992 b : pp. 351-352〕参照）。この事実一つとっても中野さんにとってこのエピソードが相当強烈な体験であったことは確実のように思われる——を味わっているわけだが、ぼくたちはそこに、中野さんにとっての母の存在の意味の、すべてではないにしても、重要な一側面を垣間見ることができる。

第三のエピソードは、35「路傍の石」である。

九月十三日「火曜、映画へ行った、『路傍の石』……。涙がぼろぼろ流れるままに両手を握りしめて僕はスクリーンを見詰めていた。帰ると二階に上がって原稿用紙をひっぱり出して書きなぐった。みんなお母さんのことだ。」(p. 224)

中野さんが「お母さんのこと」についてどういったことを「書きなぐった」のか、知りたいところだが、今となつては、その具体的な内容はつかめない⁶⁾。しかし、こうしたエピソードから言えることは、中野さんには、何かちょっとしたきっかけが与えられさえすれば、母にまつわる思い出が奔流のようにふきだしてくる心的メカニズムがあつて、しかも、その思い出は強い情動性をおびているらしい、ということである。

これら三つのエピソードに、さらに例の「ハチマキ石のエピソード」

野さんのそれとして読み込むことができるのであれば、一つの解釈として、母にそのようにしてもらうことがこの上なくありがたいことであって、自分はそれに応えて、しっかりと立ちつくしていけるだけ強くなくてはならないし、何としても母がやってくださることに応えていけるだけの存在にならなくてはならない、という幼い中野さんの決意のようなものを、そこに読みとることができるかもしれない。

第二のエピソードは、27「姫路行前夜」だ。

……明日、姫路高校受験に出発だ。昨夜、久留島の姉妹が来たので姉と三人がシタのオクのザシキを占領し、母は二階へ来られ、母と浩と僕が枕を並べて寝る。「ひさしぶりやな」と母が言った。全く久しぶりだ。電気を消してから一時間以上も垂水のこと小浜のこと須磨のこと津のことなど昔の思い出話をした。……母の声が眠気がかかってきたので話を止めたが、それからも遠い遠い祖先のことや江戸のお墓の、祖先の親のこと、隠居にかけてある油絵の曾祖父、今寝ている部屋……に懸けてある写真の祖父のこと、そして古い女中や丁稚や番頭さんのこと、垂水のなかでも西隣の家主さんや東隣のアメリカ人の母と娘など次々思い出した。来年五十だという母の寝息が苦しげに聞こえ、寝付かれなかった。小守り歌が聞こえるように思えた。こんな暖かい寂しさがあるものだろうか牛乳の色のような気持ちだ。(p. 179)

このエピソードで興味深いことの一つは、高校受験へと旅立つ前夜、久しぶりに母と昔のことを語り合う時間を共有しながら、それに触発されて、中野さんが次から次へと自由連想的に紡ぎ出してくる思い出の内容が、2「祖父と曾祖父の額」の話 (pp. 15-16) や、とりわけ「おたけどんへの手紙」(pp. 184-187) で触れられている内容と、驚くほど重なりあっているということである⁵⁾。この事実は、中野さんにとって思い

母帰宅)], といった理由のものが多い。

中野さんが母親に言及するもう一つの場合は、何らかの出来事をきっかけにして、母にまつわるエピソードが想起されてくる、というものである。『中学生』には、既に先に注目した「ハチマキ石のエピソード」(水野 [1993 b : p. 133]) を別にしても、そうしたエピソードが三つ出てくる。

まず第一のエピソードは、21「風呂の思い出」である。

……暖かい新しい湯につかって、水面を、ほうようにして昇る湯気を見ながら、あまり良い気持ちなので、とろりとろりしながら、とりとめのないことを考えて、つい時がたった。／指先の皮にクシャクシャと、しわが寄ったのが面白くて、両手の指先をすりあわせてみる。幼い頃、これを、ユビガ、オーバーサンニナルと言っていたのを思い出した。あまり長いあいだ湯船で遊びをしていると、母が「指をお見せ」と言って「それ、指がお婆さんになったやろ。もう、あがらなあかんえ」と言って、堅くしぼった手ぬぐいで、まだ足元のしっかりしない僕の身体を強くふいてくださるのを踏みこたえたものだった。(pp. 109-110)

これは、3.3.1.での用語を使うなら、明らかにフラッシュ・バック的体験の一例である(水野 [1992 b : p. 355])。母に自分の身体をふいてもらいながら、「踏みこたえ」ていた——恐らくはヨチヨチ歩きだったと思われる——中野さんが、その当時、幼心に何を考えていたのかは、もちろんわからない。が、その場面が中野さんに、母との関わりで何かある強烈な印象を与えたことだけは伝わってくる。その印象とは何だったのだろう。「僕の身体を強くふいてくださる」という表現自体は、日記執筆時点における母親に対する中野さんの気持ちをあらわすものではあるが、この表現に反映されている中野さんの関わり方を原場面での中

それ以上に頻繁に母の言動が記録されている。基本にあるのは、ここでも、一種の定点観測の発想であって、その背後には、母に対する尊敬（一例として、すぐ前に引用した14「軍事演習」における「お母さんのつくってくださった」という言い回しに注目のこと）と親密さが控えているようだ。ただし、父の場合には、その発言に感心したので、というものがかなり見られたが、母の場合はそういうわけではない。例えば、時局の洞察への示唆といった観点から〈何としても母の発言を書きとめておかなくては……〉といった気持ちで筆をとった、というよりも、母のそれも含めて、そこで語られる内容や語り口が、たまたま楽しいものだったから（3「ハタのオバハン」）とか、新しい体験談として（17「父

第5表 《母》への言及のある小見出し一覧

• 1「渡満部隊」(2)p. 14	• 2「祖父と曾祖父の額」(2)p. 16. ℓ. 3
• 3「ハタのオバハン」(2)pp. 16-17	• 4「二・二六事件」(3)p. 22, ℓ. 1-2
• 5「ファウスト」(3)p. 32, ℓ. 9-10	• 6「弟も二中へ」(4)pp. 33-36
• 7「誠一叔父の渡満」(4)p. 39	• 8「万葉集」(5)p. 58
• 9「悪夢」(6)p. 62	• 10「島本先生の凱旋」(6)p.64, ℓ. 8
• 11「点景」(6)p. 67	• 12「短いメモ群」(6)p. 68
• 13「母の兄中尾万三の死」(7)pp. 70-76	• 14「軍事演習」(8)p. 88, ℓ. 9-10
◇15「母と年中行事」(8)p. 91	◇16「母飛び帰るの報」(8)p. 92
◇17「父母帰宅」(8)pp. 93-94	• 18「秋の日々」(8)p. 97, ℓ. 9
• 19「前にいた女衆と男衆」(8)p. 98	• 20「宮本武蔵」(9)p. 108
◎21「風呂の思い出」(10)pp. 109-110	• 22「正月十五日」(10)pp. 115-116
• 23「春寒し」(10)p. 121, ℓ. 2	• 24「明ちゃんの結核」(10) pp. 135-136
• 25「旅のあと」(11)p. 147, ℓ. 11	• 26「忠二郎叔父出陣」(12)p. 157, ℓ. 4
◎27「姫路行前夜」(14)p. 179	• 28「新しい女中」(16)p. 191
• 29「コドモシ」(16)p. 192	• 30「兄に赤紙」(16)p. 195
• 31「兄の応召」(16)p. 201, ℓ.1	• 32「兄の面会」(17)p. 207
• 33「高原の日々」(17)pp. 213-214	• 34「大丸の火事と大文字」(18)p. 221
◎35「路傍の石」(18)p. 224	• 36「九月後半の日々」(18)p. 225, ℓ. 14
• 37「十月の日々」(18)p. 227, ℓ. 7-8	• 38「見合い写真」(18)p. 228
• 39「兄兵営より外出」(19)p. 233	• 40「愛称的敬語」(19)p. 238
• 41「法事」(19)p.243	• 42「兄外泊」(20)p. 245
• 43「葉書交信」(20)p. 247, ℓ. 203	• 44「滑り止め受験」(20)p. 250
• 45「姫高合格」(20)pp. 253-254	

論文を掲載し、日本の立場を説いた。私は、当時、米国に住んでいて、はなはだ嬉しかった」(p. 104)) から推測される石黒氏の立場を所与とすれば、「話の展開の仕方」という点だけではなく、そもそも話の内容自体からしても、石黒氏に、自分の見解とはあまりに異質だ、と受けとめさせるだけの内実を持っていたのではないだろうか。いずれにせよ、ここには、当時の支配的考え方とははるかにへだたった、恐らく相当の異端、もしくは少数派の批判的見解が見られるのであり、またそれだけに非常に個性的な、中野さんの父親像が浮かび上がってくるのである。

要するに、『中学生』執筆当時の中野さんにとって、こうした父親は、身近なところにいて親しみがもてるというだけでなく、あらゆる面で尊敬でき、しかもその言動に全幅の信頼がおける相手だったのである。

(4) 母の場合 (第5表参照)

母親への言及は、大きく言って、二つのグループに分けられるように思われる。一つは、日常的次元での母の言動への言及である。例えば、

……母は大丸へ兄と、兄のレインコートを買いに行く。…… (8
「万葉集」, p. 58)

湯上がり姿で、髪をくりくりっと巻き上げて、ゆかたを着て、母は言った。「ああ、すずしやの。ごくらくや。」(11「点景」, p. 67)

日光のサンサンと照り、肥……のかおり来る中で、国防婦人会の白エプロンから接待のお茶をもらって、お母さんのつくってくださったお弁当を食べた。(14「軍事演習」, p. 88)

といった具合に、である。この次元では、父の場合と同じく、あるいは

では、父は、『いや、私は日本人だから、しばらくは事実と認めて置きたい』と答えた。(p. 103)

というくだり。もう一つは、21「徳利割りの侵略」の中心部分での話である。満州事変以降の日本社会においては、当時の世界情勢に関する、日本人としての恐らく一つの有力な見通しを述べたものではないかと思われる石黒氏の『世界は将来、日米独に三分、あるいは日米独ソに四分されよう。伊はファッショで、長続きすまい。仏は疲れ、英は老いて墓場に片足突っ込んで居るからだ』という発言を紹介した後、中野さんはこう続けている。

父はこれに対して、こう言った。／『その方法はきっと「徳利割り」式侵略だろう』、と。石黒氏が、その意味を問うと、父は、こう説明した。『明治維新の当時、徳利に水を入れて、ぶらさげて街を歩く無頼の徒があった。金を持っていそうな人を見ると、突き当たり、持った徳利をとり落として、割れた徳利を指差し、「おれの酒をどうしてくれるか」と、言い掛かりを付け、若干の酒手を揺する。世界政策時代の各国の侵略も、皆このトックリワリだ。』(p. 104)

編者の中野さん自身、「父のこの強烈な発言で、石黒氏は、貿易商の仲間とは、話の展開の仕方が違うと知ったせいだろうか、ちょっと話ごとぎれ、」(pp. 104-105)と説明を加えているが、「世界政策時代の各国の侵略も、皆このトックリワリだ」という、現時点から見ても鋭い洞察に満ちた発言は、石黒氏に対して、絶句せざるをえないほどの衝撃を与えていた可能性が強い。おそらく、この話のすぐ前での石黒氏の発言(「……〔日米開戦については〕米国の与論もまた激しかったが、大阪朝日新聞は巨費を投じて全米紙に、米国の日支問題観に堂々と反ばくの大

バナナを焼いて食べる。」(8「三月十日」, p. 31), あるいは, 父の講演についての感想(14「父の講演」, pp. 49-50)などは, 忘れずに記録されている。どうやら父の言動, とりわけ発言は, 中野さんが自分の身のまわりの出来事を書きしるしていく際の一つの重要な準拠点, もしくは一種の定点観測点となっていたようである。

しかも, 例えば「浩, 浩。カッコウや。カッコウが, 鳴いてる。お父ちゃんに, 言うといない……」(19「カッコウ」, p. 94)といった中野さんの発言に見られるように, 中野さんは父親に対して, 常に非常な親しみを感じているのであって, 『中学生』で見る限り, 父への反発は, まったくと言っていいほど見られない。これは, 中野さんが尊敬する, あの中尾伯父や井上先生の場合と比べても, きわだった特徴である。いや, それどころか, 「朝, お千代どんに僕がえらそうなことを言って叱っていたら, 父が奥から, 『失礼なことを言うな!』と僕を叱った。短いお叱りがよくきいた。」(16「短いメモ群」, pp. 68-69)や, 29「父の説と寺内中将」のエピソードの記録(pp. 137-138)に見られるように, 中野さんは, 多くの場合, 父の判断を全面的に肯定し, 父の言葉に感心しきっていると書いていいだろう。

とりわけ, 時局の判断・評価に関わる重大な局面で見られる父親の考え方は, 中野さんが最も信頼を置いているものであり, そのことは, 例えば, 6「二・二六事件」, 20「名古屋の石黒夫妻」, 21「徳利割りの侵略」などの日記の書き方から見ても明らかである。ここでは, 中野さんがほれこんでいる父親の——こうした局面での——特徴的な姿がかなりはっきりと書きとめられている個所を二つほどあげておくことにしよう。一つは, 20「名古屋の石黒夫妻」の末尾での

話は次第に現代に近づいて, 石黒氏, 『私がニューヨークにいた頃, 米国の新聞は満州事変の口火となった柳条溝爆破事件は, 事実無根だと報じて居ましたが, そうかも知れません』と言うのに対し

第4表 《父》への言及のある小見出し一覧

• 1「中尾の伯父」(2)p. 13	• 2「弟の誕生日と書籍購入」(2)p. 14
◇ 3「祖父と曾祖父の額」(2)p. 16	• 4「読書と冬の日」(2)p. 18, <i>ℓ.</i> 8-14
• 5「山口の季はん」(2)pp. 19-20	◎ 6「二・二六事件」(3)pp. 21-26
• 7「自画像と人間論」(3)p. 30, <i>ℓ.</i> 5-6	• 8「三月十日」(3)p. 31, <i>ℓ.</i> 7
• 9「ファウスト」(3)p. 32, <i>ℓ.</i> 7-8	• 10「弟も二中へ」(4)pp. 33-34, p. 36
• 11「誠一叔父の渡満」(4)p. 37, p. 39	• 12「プチ・ショウズ」(4) p. 41, <i>ℓ.</i> 3
• 13「戦争と父の弟達」(4)p. 44, <i>ℓ.</i> 9-10	◇ 14「父の講演」(5)pp. 49-50
• 15「学期末試験前」(5)p. 57	• 16「短いメモ群」(6)pp. 68-69
• 17「母の兄中尾万三の死」(7)p. 70, <i>ℓ.</i> 2	• 18「父母帰宅」(8)pp. 93-94
• 19「カッコウ」(8)p. 94	◎ 20「名古屋の石黒夫妻」(9)pp. 99-103
◎ 21「徳利割りの侵略」(9)pp. 103-105	• 22「宮本武蔵」(9)p. 108
• 23「富野庄の姉」(10)p. 109	• 24「正月十五日」(10)pp. 115-116
• 25「陸軍はファッショ化」(10)p. 118	◇ 26「医療組合」(10)p. 120
• 27「一子ちゃん新夫妻入洛」(10)p. 128	• 28「明ちゃんの結核」(10)p. 136, <i>ℓ.</i> 4
◎ 29「父の説と寺内中将」(11)pp. 137-138	• 30「叔父たちの時局観」(11)p. 141, <i>ℓ.</i> 5
• 31「昭和十三年正月」(13)pp. 171-172	◇ 32「中学最後の通知簿」(13)p. 172
• 33「祭の日の昔噺」(16)pp. 192-195	• 34「白蛇」(16)p. 197, <i>ℓ.</i> 4-5
• 35「兄の応召」(16)p. 199	• 36「兄の面会」(17)p. 207
◇ 37「店員応召とチャーヤンの報告」(18) p. 222, <i>ℓ.</i> 6-8, p. 223, <i>ℓ.</i> 3-7	• 38「九月後半の日々」(18)p. 225, <i>ℓ.</i> 14
◇ 39「十月の日々」(18)p. 227, <i>ℓ.</i> 4-15	• 40「漢口陥落」(18)p. 229
• 41「兄兵営より外出」(19)p. 233	• 42「コトハジメ」(19)p. 236
• 43「伊吹山」(19)p. 241	• 44「法事」(19)p. 243, <i>ℓ.</i> 1-8
• 45「クオバディウスと枚方火災」(20)p. 249	◎ 46「滑り止め受験」(20)p. 250
• 47「姫高合格」(20)p. 253, <i>ℓ.</i> 9	

p. 57), さらには「お祭りの日, 回顧的気分で父が始めた昔の話が面白いので, 急に思い立って, そばにあった紙に書き取りました。」(33「祭りの日の昔噺」, p. 192) といったように, 父親の語る思い出話も多い。さらに, 「浩の入学式。父と行った。」(12「プチ・ショウズ」, p. 41) とか, 「父が先日来た台湾総督府につとめている人に聞いた, と言って,

指を左手できつく握って、頬が次第にこわばってくるのをこらえた。……僕は唇をかみ、親指を握りしめた。」(pp. 72-73) という形で精一杯に表現している。これを見ても、中尾伯父の死が当時の中野さんに相当なショックを与えたことは疑いえない。しかし、この記述は同時に、そのショックが中野さんの存在を完全に混乱に陥れ、その内面に圧倒的な心理的空白を生み出すほどのものではなかった——中尾伯父への中野さんの同一化の度合、もしくは心理的依存度は、そこまでの強さをもっていなかった——ことも示唆しているように思われる。

こうして見てくると、中尾伯父というのは、中野さんにとって、あくまで、はるかかなたから尊敬の眼差しで仰ぎみることのできる頼もしい存在としてあったとすることができるかもしれない。

(3) 父の場合 (第4表参照)

『中学生』の中で父親は、日常的な場面での言動も含めて、いたるところでかなり頻繁に登場してくる。例えば、「今日も久子の料理か」(2「弟の誕生日と書籍購入」での中野さんの姉のつくった料理についての発言, p. 14) とか、「父は、五十三、『こんなにたべるの嫌になるな』と言っておられた。」(4「読書と冬の日」における節分の豆を食べた時の発言, p. 18) とか、「やああ、こいつああ、えらい自画像やなあ」(7「自画像と人間論」での中野さんの自画像についての感想, p. 30) といった具合に、父親のちょっとした発言が書きとめられているし、

父……は、オオオジイサンを知っているそうだ。「いんきよ……から、『ぼん、ここへおいで』と言うて、壺のなかから甘納豆をくれはった」と、父が思い出話をする。銀髪の父も「ぼん」と呼ばれた時代があったのだ。(3「祖父と曾祖父の額」, p. 16)

とか、「栗をむさぼりながら父の思い出噺。……」(15「学期末試験前」,

比べると、その重要さの中身は、かなり異なっていたように思われる。

どう異なっていたのか。『中学生』で見る限り、まず何と言っても、中尾伯父の登場回数が非常に限られている（全部で9カ所にすぎない）ということがある。しかも、——4「母の兄中尾万三の死」におけるきめ細かな記述を唯一の例外として——中尾伯父にまつわる具体的なエピソードがきわめて少ないのである。しかしながら言及されている内容から判断すると、中野さんに対して強烈な印象を与える存在として中尾伯父があったらしいことがうかがえる。そうした中で浮かび上がってくる中尾伯父のイメージは次の2つである。一つは、6「徳利割りの侵略」や9「十月の日々」に見られるように、時局の判断を迫られるというコンテキストで、ぜひともその見解を聞かせてもらいたい権威者としての中尾伯父というイメージであり、もう一つは、

〔中尾伯父さんは〕富野床の篤〔三郎〕さんの叔父さんと田の肥料の入れ方について議論していた。病気なのに議論でどこまでも自説を通す。／「いや、違う。わしは、そう思わん」、少し篤さんが話しはじめると「いや、違う」と、すぐに中尾の叔父さんの声が聞こえる。(3「中尾の叔父と富野の叔父」, pp. 57-58)

というエピソードに見られるように、自己主張の強さもしくは精神の体現者としての中尾伯父のイメージである。そしてもしかしたら、これらのイメージの重なりあったところに、最初に引用した「偉い学者」としての中尾伯父の姿が焦点を結んでくることになるのかもしれない。

それはともかく、ここで、中尾伯父への中野さんの心理的距離をおしはかるという観点から、4「母の兄中尾万三の死」における中野さんの記述について若干の検討を加えておこう。中尾伯父の死にゆく姿を眼前にしながら、どうすることもできない自分の悲しさ、辛さ、いたたまれなさを、中野さんは、「僕は、上唇と下唇を替わり番にかんで、右の親

-254)

これは姫高合格の電報を受け取った時の話である。ここには、その考え方に対して非常な近しさと尊敬の念を抱きながらも、ある程度の距離がある存在としての井上先生との関係が見事に描き出されている。

(2) 中尾伯父の場合 (第3表参照)

常日頃尊敬していた中尾伯父の死を克明に記述した日記の文章に続けて、中野さんは次のような挿入を行なっている。

私は偉い学者として大層尊敬していた母の兄、中尾万三伯父の死を、何一つ見落とすまいとして記録したのでした。本草学者で中国古陶磁史の大家、そして国際的に評価されていたシノロジストであった伯父は、私に学問というものへの憧れを最初に植え付けてくれた人でした。…… (4「母の兄中尾万三の死」, pp. 73-74)

ここでは、「学問というものへの憧れを最初に植え付けてくれた人」として中尾伯父は位置づけられている。このくだりを見ただけでも、中野さんにとって中尾伯父が重要な存在であったことは確かである。しかし、中野さんにとってのロール・モデルという意味ではかなり似かよった位置を占めていたと思われる井上先生や（次に触れる）父親の場合と

第3表 《中尾伯父》への言及のある小見出し一覧

◇ 1「中尾の伯父」(2)p. 13	• 2「二・二六事件」(3)p. 24, pp. 25-26
◎ 3「中尾の叔父と富野の叔父」(5) pp. 57-58	◎ 4「母の兄中尾万三の死」(7) pp. 70-76
◇ 5「中尾の伯父の写真」(8) pp. 89-90	◇ 6「徳利割りの侵略」(9)p. 103
◇ 7「谷井伯父死去と高校不合格」(15)p. 189, ℓ. 7-8	• 8「東京の鈴木の家で」 p. 219, ℓ. 10
◎ 9「十月の日々」(18)p. 227, ℓ.4-10	

かりながら自分の位置を決めていこうとしている。ここでは、井上先生の見解は、中野さんがその基本的な物の考え方を培っていく際のいわば肥やしとして作用していたと言っているかもしれない（ただし、自分の感想や評価をかなりはっきりと示す傾向を持っている中野さんとしては珍しく、何のコメントも付さずに「先生は民俗学こそ歴史をきわめる最も信頼すべき方法だと信じておられる。」(p. 238) と書き記しているくぐりに見られるように、中野さんは井上先生の考え方にいつも完全ベッタリだったというわけではなかった点も忘れるべきではないだろう)。そうした意味では、『中学生』編集時点でなされた次のような見解の方が、井上先生のインパクトの質を、より正確に表現していると言えるように思われる。

……井上頼寿先生が私の中学時代の先生であったことが、現在の私の考え方、学問についての基礎的な態度の形成に、大きな影響を与えたと思っています。(2「拾遺会改め史学会」, p. 4)

また井上先生との交流は主として中学生在学時という限定された期間におけるものであって、中学卒業後になると交流の頻度が極端に少なくなってくることは、第2表からもうかがうことができる。

最後に、中野さんにとっての井上先生の位置を象徴的に示していると思われるエピソードを紹介しておく。

……丁稚が電報を持って来た。ああ、その電報、母が読んで僕に渡した。／すぐさま立ちあがって「井上〔頼寿〕先生のところへ行ってくる」と言って、僕は家を出た。……もう十時だった。先生のお宅は、もう皆お寝みらしく、しばらく門口に立っていたが、仕方なく引き返した。もしその夜にすぐさま先生にお会いしていたら僕は泣きだしていたかもしれない。(21「姫高合格」, pp. 253)

ションから、中野さん自身が井上先生のインパクトについて明示的に触れている個所を拾い出してこよう。

特に私の今の学問の仕方に深い影響を与えてくださったと思われる井上頼寿先生……私は先生の民俗学から、その研究態度に多くを学び得た…… (1 『京二中』と私, p. 3)

これは『中学生』編集時点での中野さんの見解の一つである。ここでの重点の置き方は、中野さんの「学問の仕方」や「研究態度」への影響という点にあると見てよいだろう。こうした指摘は、例えば〈インパクトを与える可能性のあるもの〉を論じた個所で既に引用した事例4「茶話会での先生の話」(水野 [1993 b: pp. 131-132]) などからしても確かにうなずけるところがある。学問というのは中野さんにとって非常に大きな位置を占めているわけだから、これは非常に強い影響と言っている。

しかし、『中学生』執筆当時の中野さんに即して言えば、井上先生の影響は、学問の仕方への影響にとどまることなく、というか、そうした影響をも含めて、さらにもっと深いところにまで及んでいたように思われる。例えば、5「英雄観と弘法さん」では、「井上先生の英雄観は実に立派で、僕は賛成だ。」(p. 55) として、先生の意見を要約・紹介した後、それをとっかかりにして、「平凡な凡人ではだめだが、非凡な凡人が必要なのだ。……人間は特異性を持たねばならない。……人から嫌がられず、自分でも恥ずるところのない理想的な凡人に成りたいものだ。」(pp. 55-56) という、その後の中野さんの中核的価値観の表明と言っている彼自身の見解を紡ぎ出しているし、13「井上先生と」では、「白紙投票をしてきた」という先生の発言を受ける形で、「僕も、今の場合、白紙投票こそ、もっとも『清き一票』だと思うが、これは人に言えるほど確とした意見ではない。」(pp. 130-131) と、先生との距離をは

言は、「心にしむ言葉たまいけり」と書きとめられるほどの重みを持った言葉として受けとめられているわけで、そこには、当時の中野さんにとっての父の発言、ひいては存在の大きさが暗示されていると言っているだろう。

以下での検討は、この◎印をつけた個所を中心にして、先にあげた15の事象について、それらが中野さんの社会的自己形成に対してどのようにインパクトを与えたと言えるだろうか、という問いを念頭におきながら、それらの事象が中野さんに対して持っていたかもしれないその可能な意味を解釈する形で行なったものである。それでは次の4.2.2.では、こうした検討の結果明らかになったことを、15の事象の一つ一つについて個別的に浮き彫りにする形で述べていくことにしよう。

4.2.2. 中野さんの自己もしくは自己形成に インパクトを与えたと思われる諸事象

(1) 井上先生の場合 (第2表参照)

まず、編集の意図を前面に押し出している「一、自由日記帳」のセク

第2表 《井上先生》への言及のある小見出し一覧

◎ 1 「『京二中』と私」 (1)pp. 3-4	◎ 2 「拾遺会改め史学会」 (1)p. 4
◇ 3 「史学会の予餞会」 (1)pp. 4-8	◎ 4 「茶話会」 (1)pp. 8-10
◎ 5 「英雄観と弘法さん」 (5)pp. 55-56	◇ 6 「井上先生の西洋史」 (6)p. 61
• 7 「短いメモ群」 (6)p. 68, ℓ. 13-14	◇ 8 「母の兄中尾万三の死」 (7)p. 75
◇ 9 「知井坂越え小浜・海津の旅」 (7)pp. 76-83	◇ 10 「井上先生の修身教育批判」 (8)p. 89
• 11 「巨椋池」 (10)p. 110-113	• 12 「史学会の初瀬・大將軍山・伊那佐山行」 (10)pp. 121-127
◇ 13 「井上先生と」 (10)pp. 130-131	• 14 「木曾福島から白川郷への旅」 (11)pp. 141-143
◇ 15 「旅の野帳風メモ」 (11)pp. 143-146	• 16 「もうひとつ葉書」 (11)p. 150
• 17 「チャガマの出陣」 (12)p. 152, ℓ. 1-3	◇ 18 「奥大原行」 (12)pp. 157-164
• 19 「盲教育展」 (15)pp. 183-184	◇ 20 「井上先生」 (19)pp. 238-239
◎ 21 「姫高合格」 (20)pp. 253-254	

われているが、まちがっている。野球が流行していても、スポーツは見るものでも読むものでもない。誰にでもできて費用もかからないスポーツ、これはハイキングをおいてほかにはない。／父がこんなことを言ったかどうか僕は知らない。少々想像してみただけだ。／…… (pp. 49-50)

中野さんはここで「少々想像してみただけだ」と言っているが、後に(3)《父の場合》のところでより詳しく見るように、父親の日常的言動をいわば‘密着取材’し続けていた中野さんの父親への^{シンクロナイジング}同調能力から推しはかるならば、ここに書きとめられている内容は単なる想像の産物というよりも、このテーマに関する当時の父親の主張内容のエッセンスをかなり正確に言い当てたものとみなしてもいいかもしれない。

第三は、左横に◎の印がつけてあるもので、中野さんの自己形成に対して、内容上、特に関連があることがはっきりと読み取れるものである。(1)での議論では、〈インパクトを与える可能性のあるもの〉という観点から選び出してきたものにあたる。一般的には、例えば、20「名古屋の石黒夫妻」や21「徳利割りの侵略」のように、引用するには若干長くなりがちなものが多くなる。ここでは、一例として、46「滑り止め受験」から、

三月九日、「朝より身支度などす。時きたれば、父に、『行ってきます』という。父、『それでは、いってこい』とのみ言えり。短けれど、心にしむ言葉たまいけりと思う。……」(p. 250)

というくだりを引いておこう。《『行ってきます』→『それでは、いってこい』》というやりとり自体は、状況や相手次第では、何の変哲もない月並みなあいさつとなりかねないものだ。しかし、受験に出かけようとしていた中野さんにとっては、『それでは、いってこい』という父の発

把に3種類の情報を区別する、という形をとることにした。

第一は、左横に・の印をつけたもので、これは、単にその事象が言及されているにすぎないことを示す。《父》の場合を例にとって説明すれば（後の第4表参照）、1の「中尾の伯父」の小見出しの項には、「……つまり馬鹿じゃ、と言うことになるのや」という中尾伯父さんの口癖を受けて、『「馬鹿や」になってしもうたら、もうしまいや』と父が〔ひやかして〕言った。」(p. 13) というくだりがあるし、次の2「弟の誕生日と書籍購入」の小見出しのところでは、『今日も久子の料理か』と父は、先日の、姉さんの女学校で習ってきたライスカレーが余程気に入っている。」(p. 14) と書きしるされている。今ここで、中野さんの自己形成への関連性という観点からこれらのデータの意味を読み解こうとしたとしても、それはなかなか難しいと言わざるをえない。つまり、それらが日記に書きとめておくに値すると中野さんが判断したものだという点を除いて、はっきりとした形で、それ以上の意味をこれらのデータからつかみとってくることは、その場にいた本人はともかくとして、少なくとも分析者のぼくにはできないということである。

第二は、左横に◇の印をつけたものだが、これは、その事象について、ある程度のスペースがさかれており、中野さんの自己形成への関連性という観点から見ても、読み方次第では——つまり、深読みしようとするれば——それなりに重要な意味をおびてくる可能性のあるものではあるが、少なくとも、明示的メッセージを読みとるという観点からすれば、その重要性は次のグループの情報ほどきわだっちはいないものである。すぐ前の(1)での議論で言えば、〈自己もしくは自己形成へのインパクト〉という視角との関連で浮かび上がってくるデータにあたるものである。一例として14の「父の講演」から関連箇所を引用しておく。

昭和十一年「五月十二日、今夜、朝日会館で父が『ハイキングの意義』の講演をしてきた。ソモソモ日本で今スポーツが盛んだとい

という観点から見てかなり重要な部分をカバーしているという予感に支えられながら行なうものであるが、この局面では、万人に納得のいく「客観的な」選択は不可能であって、分析者であるぼくの主観的バイアスが否応なく入り込まざるをえないということは、お断りしておかなくてはならない。これは、先の疑問に対する答というよりも、質的データ分析が必然的に直面せざるをえない事情の確認である。言いかえれば、この15の事象を選び出してきたのは、最終的にはあくまで分析者であるぼくの主観性のなせるわざである、ということだ。しかし、——そしてこれが第二点なのだが——この主観性は単なる恣意的な主観性ではなく、データとの対話に由来する主観性なのである。つまり、一方では分析者の直観に支えられながらも、他方ではデータとの格闘・対話を重ねていく中からその直観的見通しを（場合によっては大幅に）修正していきながらたどりついていく主観性と言うことができる。そして実は、先に「2. 見出し分析」のところで、10の関連テーマ領域（〈軍事・時局〉、〈学校・受験〉、〈家族・親族〉、〈店関係者など〉、〈友人〉、〈日記・手紙など〉、〈読書、美術・演劇・映画・音楽鑑賞など〉、〈夢〉、〈旅〉、〈風俗・風物〉）や、内容的にセクションを代表していると思わせる7つの大見出し（「二・二六事件」、「母の兄中尾万三の死」、「徳利割りの侵略」、「チャガマの出陣／忠二郎叔父出陣」、「姫路高校受験」、「おたけどんへの手紙」、「姫高合格」）などを析出しておいたのは、そうした分析者の主観的バイアスによるブレを可能な限り少なくするための間接的歯止めとして機能させたいという狙いからなのである⁴⁾（水野〔1992 a: pp. 97-101, pp. 108-109〕）。

(2) 次は、結节点的事象によって関連データをまとめあげていくやり方について、である。ここでは、各事象について、その事象についての言及のある個所を、〈通し番号、小見出し名、セクション番号、頁と（場合によっては）行〉という形ですべて書き出し、その上で、(1)での議論を踏まえて、中野さんの自己形成への関連性という観点から大雑

しているさまざまな関係的対象との相互作用の過程で、あるいは生成され、あるいは表出され、あるいは繰り返し確認されてくる‘本人らしさ’——《本人を特徴づけている諸傾向》——なのである。これには、いかにも‘本人らしさ’を彷彿とさせる言動・発想・思考・交流・関わり方等のスタイルが含まれる。

こうした観点から『中学生』でぼくの注目した事象は、〈人〉としては、(1) 井上先生、(2) 中尾伯父、(3) 父、(4) 母、(5) 弟の浩、の5人、それから〈人〉に関連するものとして(6) (両親と中尾伯父と弟を除いた) 家族・親族の動き。〈傾向〉としては、(7) 思い出嗜好、(8) 哲学的思索と内省、(9) 読書・芸術鑑賞と標語、(10) 民俗的なものへの興味関心、(11) (旅やスキーを含めて) 自然との交流、(12) 対人的交流、(13) 時局観、(14) 受験・勉強への取り組み方、(15) 書きとめておくという行為、の9つ、計15だった。

なぜ、これら15の項目を結节点的事象として設定したのか。言い換えれば、なぜこれらの項目であって別の項目ではないのか。読者の中には、こういう疑問をもたれる方も出てくるだろう。それは自然なことである。これらの事象を設定することによって、『中学生』執筆当時の中野さんに何がインパクトを与えたか、という問いにどれだけ答えていることになるのか、という疑問に対しては、後に中野さんの自己もしくは自己形成にインパクトを与えたと思われる諸事象についての個別的検討をすませた段階で立ち戻ってくることにしたいが、先の疑問に対しては、さしあたり、次のように述べておきたい。

まず第一は、自己環境の構成要素の候補ならびに結节点的事象として何を選び出してくるかは、どうしても分析者の主観に依存せざるをえない、そうした性格のものだ、ということである。どういう候補ならびに事象に注目するかによって、それ以降の議論がかなり方向づけられていくだけに、非常に重要な作業であり、分析者としては関連データを全体としてにらんだ時に、自分が着目した事象が、自己形成へのインパクト

第1表 『中学生』におけるIP小見出し一覧*

中学生の買った自由日記帳(1)** 『京二中』と私(3) 拾遺会改め史学会(4) 茶話会(8) 二・二六事件(21) 自画像と人間論(28) 弟も二中へ(33) プ チ・ショウズ(40) 時局(42) 英雄観と弘法さん(55) 中尾の叔父と富野の叔 父(57) 真人と名利(67) 短いメモ群(68) 小鳥と子蛇(69) 母の兄中尾万三 の死(70) 秋の日々(95) 名古屋の石黒夫妻(99) 徳利割りの侵略(103) 風 呂の思い出(109) 深い心(110) 勘太先生と女中(116) 陸軍はファッション化 (118) 将来の志望(118) 父の説と寺内中将(137) 奥大原行(157) 妄想 (167) 京二中卒業式(173) 卒業翌々日の夢(175) あと五日(178) 姫路行前 夜(178) おたけどんへの手紙(184) 谷井伯父死去と高校不合格(189) 増田 へ(190) 祭の日の昔噺(192) 路傍の石(224) 十月の日々(226) 漢口陥落 (229) 歌舞伎初見(233) 滑り止め受験(250) 姫高合格(251)

*より正確に言えば《『中学生』執筆当時の中野さんに対して強烈なインパクトを
 与えている可能性がある体験エピソードを含んでいると判断される小見出し一覧》
 ということになる。

** ()内の数字は小見出しの出現ページを示す。

-150))。この発想を生かしながら、中野さんの自己環境の構成要素とおぼしきもの、もしくはそれらとの関わりで浮かび上がってくる中野さんに特徴的な何か（この両者を併せて、以下、《結节点的事象》もしくは単に《事象》と呼ぶことにする）を、関連データをまとめあげていく際により大きなグルーピングの柱として設定することにした。これによって、間接的ながら²⁾、『中学生』執筆当時の中野さんに何がインパクトを与えたか、という問いに、かなりのところまで答えることができるはずと考えたわけである。

なお、結节点的事象析出にあたってより具体的なてがかりとしたのは、大きく〈人〉と〈傾向〉の二つである。ここで〈人〉というのは、いわゆる「重要な他者たち (significant others)」と規定しうる人々を含めて、何らかの意味で本人の自己形成に関連のある人々のことで、前の段落で自己環境の構成要素とおぼしきものと規定したものの一部を構成している³⁾。次に、〈傾向〉とは、すぐ前で中野さんの自己環境の構成要素とおぼしきものとの関わりで浮かび上がってくる《中野さんに特徴的な何か》と表現したものである。この言い回しでもってスポットをあてたいと思っているのは、自己環境の構成要素とおぼしきものを構成

という視角との関連だけでデータの絞り込みを行なおうすると、難しい問題にぶつからざるをえない。というのは、ここではいちいち数え上げることはしないが、この視角との関連で浮かび上がってくるデータの数が相当にのぼることは火を見るより明らかなのだから、その結果をそのまま提示したとすればあまりにも細かくなりすぎて、どう收拾をつけていいか分からなくなってしまう危険性が大きいからである。

そこで〈インパクトを与える可能性のあるもの〉という発想と議論をてがかりにしながら、そうしたデータのうち、特に中野さんに対して強烈なインパクトを与えている可能性のあるものを析出してくることにした。第1表は、そうしたデータが含まれている小見出しを抜き出してきたものである。これらは、中野さんの社会的自己形成へのインパクトの問題を検討するという場合に、——どういう形で言及するかは別にして——ぼくとしては、最低限どうしても自分の視野の内に組み込んでおきたいデータ群と言えるものである。しかしながら、ここまで絞り込んだとしても、小見出し数だけで言っても40にのぼるのだから、中野さんの社会的自己形成へのインパクトいかに問題に見通しを与えるという観点からすればまだまだデータ数が多すぎると言わざるをえない¹⁾。

そこで次にそうした有力なデータも含めて、関連データをまとめあげていく際のでがかりとしたのが、〈自己環境の構成要素〉という視角である。「自己環境というのは、ある個人の自己を取り巻く形で、しかも自己過程をクローズアップしてこようという脈絡で関わりを持ってくる対象世界的諸契機が作りだしてくる世界のこと」であり、この自己環境の構成要素「には、その個人の自己形成に関連のあることが確定している‘主要な関係的对象’とともに、本人自身としてはその存在の重要性を意識していないにもかかわらず、事実上、その個人の自己を下支えしていると見なすことができる‘副次的な関係的对象’が含まれる」ことは、すでに前項の小括でも触れておいた（水野〔1993 b: pp. 149

と思うが、その一環として、ここではまず、実際に行なったデータ絞り込みの基礎作業の要点を簡単に紹介するとともに、「4.1. 自己もしくは自己形成へのインパクトと自己環境の構成要素」までの議論や成果と関連づける形で、なぜそうした形での絞り込み方をすることになったのか、という点に触れておきたい。

(1) データ絞り込みの作業を進めていく際にぼくが基本的に準拠したのは、4.1. でかなり詳しい展開を行なった〈自己もしくは自己形成へのインパクト〉という視角、〈インパクトを与える可能性のあるもの〉という発想、それから〈自己環境の構成要素〉という視角の三つである。

まず、本人に由来するインパクトという発想も含めて〈自己もしくは自己形成へのインパクト〉という発想全般を念頭におきながら『中学生』を読み進め読み直す中から、中野さんの社会的自己形成に何らかの形でインパクトを与えたと思われる事象を一つ一つ選び出してくることにした。その際主として参考にしたのは、「3. テクストのタイプの分析」のところでも触れた〈体験〉ポテンシャル（つまり、『中学生』当時の中野さんに生起していた生活上もしくは人生上のエピソードを考えていく上で関連が出てくるかもしれない重要な体験）や、体験群2や体験群3に属すると思われるものに言及しているとぼくが判断した個所であり、またテキストのタイプということで言えば、対象の簡潔な描写に本人の感想・評価が付加もしくは混入しているタイプCや、日記で主題化されている出来事との関わりで浮かび上がってくる本人の気持ちや想いがクローズアップされているタイプD、本人自身を相手に語りかけたり言い聞かせたりしているタイプE、それに本人の内面世界での出来事を対象の焦点にしているタイプFのテキストである（水野〔1992 b : pp. 349-360; 1993 a : pp. 196-206〕）。この作業のメリットは、その気になれば、中野さんの自己もしくは自己形成に対して、何がインパクトを与えたのか、という問いに個別的な形でかなり細かいところまで答えることができるという点である。ただし、〈自己もしくは自己形成へのインパクト〉

『中学生のみた昭和十年代』と 個人生活史研究

—三段階の分析の試み—(下)—2

水野節夫

1. はじめに
2. 見出し分析 (以上第 38 巻第 3・4 号)
3. テキストのタイプの分析 (第 39 巻第 2・3 号と第 4 号)
4. インパクト分析
 - 4.1. 自己もしくは自己形成へのインパクトと自己環境の構成要素 (以上第 40 巻第 1・2 号)
 - 4.2. 中野さんの社会的自己形成へのインパクトの検討
 - 4.2.1. 関連データの絞り込み方について
 - 4.2.2. 中野さんの自己もしくは自己形成にインパクトを与えたと思われる諸事情 (以上本号)
 - 4.2.3. 小括にかえて
5. 終わりに

4.2. 中野さんの社会的自己形成への インパクトの検討

4.2.1. 関連データの絞り込み方について

以上の予備的な検討をふまえて、それでは次に、このセクションのはじめで提起しておいた中野さんの社会的自己形成へのインパクトの問題を検討してみることにしよう。中野さんの場合、何がどのようにインパクトを与えたと言えるのだろうか。

以下では、この二重の問いに対するぼくなりのお答えを出していきたい